

キララ新聞 No. 42

発行 キララ新聞社
発行責任者 秋山 眞兄
山梨県北社市白州町横手 2259
白州郷牧場内

「書を読み、自然に親しみ、勤労にいそむ」

2009年1月30日

TEL:0551-35-0131・4520
FAX:0551-35-0132

キララ新聞42号は、今冬と昨秋のきららの学校報告を合併してお届けします。秋のきららの学校報告が遅れてしまい申し訳ありません。

きらら冬の学校の報告です。

子供の参加人数は小学生15人、中学生2人、高校生1人、スタッフ合わせると総勢約40名。

学校期間中は、朝晩の冷え込みはありましたが、日中は暖かく、まるで秋の学校のような感じでした。残念なことに子供達が帰った数日後に雪が積もりました。



1月4日 (1日目)

●開校式

●初詣

神主さんの計らいで、全員で神社の中に入り年賀のお祓いを受けました。御神酒(子供はカルピス)もいただきました。

●麴講座(高学年女子)

味噌作りの前に麴を仕込みました。

●大堰(オオセンギ)の探検

義文上の新鶏舎を見学してから宮川堰を登り、大堰に出たから上の鶏舎に向かって歩きました。いずれは大武川から大堰を下って歩く企画も予定しています。

●作務 採卵～牛の世話

●夕食 カレーライス

●白州シアター

「木を植えた男」

秋の学校に引き続き、再上映。

「いのちの食べ方」

これを見て子供達はどうかとらえたのでしょうか?ゲージ飼いのブロイラーやその食肉加工過程などは、翌日のプログラム、牧場で養鶏担当の若杉さん講座にもつながっています。



1月5日 (2日目)

●朝食～おっぼに亭にて

短い距離ですが、散歩の後の朝食はいいですね。朝から元気にガヤガヤと皆で卵かけご飯をいただきました。

●作務 収穫:採卵～牛の世話

●セリ田のスケート、ひよこの世話

ひよこのストレスが心配なくらい、子供達はひよこに触れることができました。小さな命を大切にすることを学べたのでしょうか。セリ田は暖冬のためか、一部を除いて氷の張りが薄かったので、氷が割れて、靴を濡らす子が数名いました。



●大麦踏み

秋に植えた大麦が小さな芽を出していました。踏まれた麦は折り曲げられ、傷つけられ、地面は押さえつけられます。その後、麦の葉は濃く、乾いた状態になり、根も長くなります。茎も強くなり、一時的に生育が抑えられますが、結果として、穂ぞろいが良くなるそうです。増収効果もあると昔からいわれています。

●もちつき

冬の学校恒例の餅つき。昼には牧場スタッフも加わり、大盛り上がり。雑煮も用意しましたが、納豆・大根おろし・キナコをまぶした餅でお腹がいっぱいになりました。



●昼食 餅アラカルト

●中山散策

普段、研修センターの正面にあり、身近にありすぎて、いつも目にしているだけの中山。山肌や尾根は、戦国時代に武田軍の山城として築き上げられ、中山砦とも呼ばれています。武田軍として活躍した、地域的武士団「武川衆」がこの砦を守り、甲斐国の北の要として重要な役割を果たしていたそうです。中山峠から40分ぐらいで山頂へ、その後1時間半かけて歩き、きららの学校がある白州横手の反対側の武川町に降りました。



●作務 採卵～牛の世話

- ベルガの温泉へ
- 夕食 鶏のから揚げ他



●チェさんの「韓国キムチ作り教室」

翌日のキムチ作りの下ごしらえ。白菜を半分に割り、塩漬けにしました。



●若杉さん講座「鶏の一生」

いつも作務などで採卵やひよこの世話などしていますが、雛からどのように成長して、いつ頃からいつ頃まで卵を産むとか、どんな餌を食べているとか、身近な存在の鶏に対して、あらためて知ることができたのではないのでしょうか。子供達も熱心に聞いていましたが、スタッフも注目して聞いていました。



1月6日(3日目)

●朝食～おっぱに亭にて

●作務 採卵～雑の世話



●チェさんの「韓国キムチ作り教室」

チェさんが本場韓国のキムチの作り方をみんなに指導。キムチの元となる、唐辛子や刻んだ野菜、アミの塩辛でベースを作り、前日の夜に塩漬けにした白菜に混ぜ込んで行きました。子供達は辛いと悲鳴をあげながらも、たくさん食べていました。チェさんは去年の春の学校の時に韓国の国立農業大学から白州に研修にきました。日本語も上手になり、今回は通訳など一切なしで日本語で子供達に指導。

来月帰国するチェさんは、研修期間中最後のきららで講座を持てたことをとても喜んでいました。

●昼食 雑煮

根菜(牛蒡、大根、人参、さつまいも)、ネギ、白菜たっぷりの汁に餅を入れて食べました。恐ろしく

らい食べ、いっぱい作ったはずなのに鍋は空っぽでした。



●味噌作り

日本の食文化の代表でもある味噌汁を飲まない子どもや、家で作らないと言う家庭が増えているそうです。小学生の5人に1人ぐらいがそうだとされています。きららでは発酵は日本の文化と考え、麴作りから味噌作りを始めます。麴と塩を混ぜ、煮立てた大豆を潰し、さらに混ぜ合わせたら大豆の煮汁で調整し、味噌玉を作ります。味噌玉を思いっきり樽の中に投げ入れて完了。食べられるのは今年の秋以降です。皆は去年の冬の学校で作った味噌を持って帰りました。



●ほうれん草の追肥

越冬栽培で作るほうれん草の追肥をします。牧場の鶏舎でできる発酵鶏糞をほうれん草が植わっている畝に沿って撒いていきます。みんな集中力を切らさずに、最後までやり切りました。

●作務 採卵

●夕食 中華丼



●校長講座

今回はいつもの講座とうってかわって、頭の体操。数学教諭でもある校長先生ならではのクイズで盛り上がりました。



●白州シアター

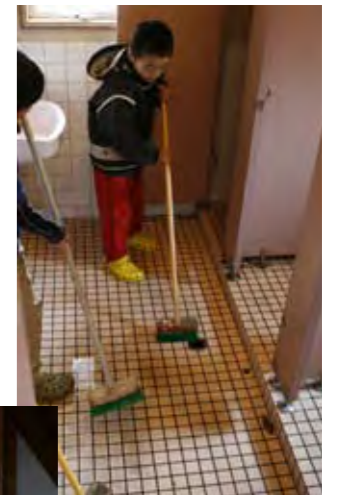
「大いなる河の流れ」「クラック」秋の学校に引き続き再上映。

1月7日(4日目)

●朝食～

おっぱに亭にて

- 作務 採卵～牛の世話
- セリ田遊び
- 掃除、荷造り
- 作文
- 昼食
- 帰路



きらら秋の学校の報告です。

子供の参加人数は小学生 11 人、中学生 1 人、高校生 1 人、ひよっこ 7 人、大人・スタッフ・保護者約 30 名、合わせると 50 名と賑やかな秋の学校でした。

11月1日(1日目)

●玉ねぎ定植

小尾下の畑に玉ねぎを約 5000 本定植しました。

牧場スタッフの裕美さんが子供達に定植



のやり方を説明し、いっせいに始めましたが、苗が細くて折れやすいので苦戦していました。後から大根収穫を終えたスタッフが合流、やっとピッチも上がり、定植予定数をやり遂げました。子供と大人が並んで入り混じっての作業はきららの醍醐味のひとつですね。

●白州シアター

「木を植えた男」「大いなる河の流れ」「クラック!」

作・フレデリック・バック

短編アニメを 3 本鑑賞、子供達には「クラック」が面白かったと言う声が多かったです。

「大いなる河の流れ」には少し驚いた様子もありましたが、3 本それぞれに感じるものがあつたようでした。翌日のきのこ狩りの時に、何もいわないのにどんぐりを拾って植えている子がいました。

●文集組み(大人)

保護者を巻き込んでの文集組みはあつと言う間に終わりました。

●作務

採卵・牛の世話

11月2日(2日目)

●朝食～

おっぱに亭での朝食初めての試みでしたが、もう少し工夫すれば、効率よくやれるのではないのでしょうか。

●作務

収穫：かぶ

●きのこ狩り

横手在住の中山義文さんに来ていただき、研修センター

の森とダンプ道路の奥の森を散策しながらきのこ狩り。クリ茸、ちょこ茸、ハナイグチ、黒しめじが採れました。

義文さん曰く、「今年は寒さが早いから、もう時期が遅い。でもその割には採れた」とのこと。きのこを見つけては義文さんに「これ大丈夫?」と聞き、「だめ～」とか「これはいいきのこだ」と判断してもらったため、毒キノコは食べずにすみました。クリ茸ご飯と芋煮の具に入れて食べました。

●芋掘り

牧場スタッフの内藤ヒカル隊長のもと、ひよっこも混じっての芋掘り大会。大きさはもうひとつでしたが、楽しそうに掘っていました。

●アンジェロさんと夕食を作ろう

夏のきららに引き続き、アンジェロさんの料理教室。今回はラザニアを作りました。



パスタ、ミートソース、ベシメルソースを層にしてバットに盛りつけ、オーブンで焼いて食べました。もちろん、すぐになくなってしまいました。

●風呂

白州べるがの温泉へ。

●アンジェロ・マジックショー&駒さんのわらべ唄 子供達は大はしゃぎ。予定を大幅に越え、10 時近くまで盛りあがりました。アンジェロさんが連れてきた橋本

エリオさんが空手の形を披露。



11月3日(3日目)

●大麦播種

まず大麦を踏んで種を外し、一列に並び、大麦を撒く人、その後ろからもう 1 列、土をかけ踏む人に分かれて作業しましたが、あまりうまくいきませんでした。カラスに穿られないで芽がでるのか、心配です。



●鶏捌き

急遽開催した鶏捌き。

夏に比べると、意外と子供達の「引き」がなかったようです。昼食は鶏と大根ステーキ、ジャガイモのイタリアンバーベQ でした。

●掃除、片付け、閉校式

布団運びなど、かなり大人に甘えた形になってしまいました。最後の片づけをどうしていくか検討課題です。



2008 年の秋、ひよっこキララがスタートしました。

キララの活動の場となっている白州で、小学生に限らず、もっと小さい子が自然や村の人々に囲まれながら、のびのびと過ごせたらどんなにいいだろう、とずっと思ってきました。制限なく、思うままに遊び、感じられる場所。

人と関わる楽しさや大切さを学べる場所。本当は暮らしの中でそのような事はできていなければならないはずですが。しかし実際はそうでない世の中で、キララはそれらを提案するひとつの場としてあります。

初めての開催には、1 歳児 3 人、4、5 歳児 4 人の親子参加がありました。実際は欲張って大忙しなスケジュールになってしまいましたが、それでも小さな子ども達が五感を大いに使って白州を満喫する姿がありました。今後改善点は色々ありますが、まずは良いスタートが切れた事、よかったと思っています。冬の学校は寒さのためひよっこはお休みにしましたが、また春に開催したいと思っています。どうぞよろしくお祈りします。

河原 駒

「武川中学校へ行ってきました」

井上 忠彦

昨年の10月30日、武川中学校3年生の生徒の皆さんに、きららの学校と白州郷牧場の取り組みについてお話しに行きました。「環境」をテーマとする総合学習の授業の一部です。

山梨の武川町は、きららの学校がある白州町の隣り町で同じ北杜市内にあります。ブランド米である「武川米」で全国的に有名な米の産地です。武川米はたいへん品質の高い、おいしいお米です。もっとも白州の米農家の方々も「武川より白州の方が水の質がよい。そのぶん米ももっとうまい」と負けてはいないのですが。

武川中学校は白州郷牧場から車で10分弱の近所です。授業では、「Radixの会」の情報誌「らでい〜」



に掲載された「きららの学校」の紹介記事をプリントとして配布し、きららの自然学校での活動について、また白州郷牧場における循環型農業や有機栽培について、わたしも生徒の皆さんに質問しながら説明しました。

時間を2時間いただきましたので、卵かけご飯のお店「おっぱに亭こっこ」で出している平飼卵の話や、甲斐駒ヶ岳から湧き出る大武川の水と、世界における淡水の貴重さ、食べ物をつくるために消費する水の全体量を表す仮想水（バーチャルウォーター）などについてもお話ししました。「牛丼を一杯つくるのに必要な仮想水の量は約2000リットル」という部分に子供たちの反応が一番あった気がします。

事前の準備が足りず、あまりおもしろい話ではなかったと思いますが、なんとか最後まで聞いてもらえました。地元の子供たちと話をすることがほとんどないわたしとしては、貴重な機会に感謝しています。これからも、このような場を「きららの学校」にいただければと思います。

さて、唐木順三は「教養といふこと」（1952年）のなかで、教養という言葉は「教え養う」と書くよ

うに、以前は教育とほぼ同義の意味で使われたと述べています。そして大正期に教養という言葉が現れる以前は、修養という語が使われていたそうです。

修養とは「則るべき典型や教法によって、全生活の行為を規制するもの」でした。仏教でいう修行に近いものです。当時、知識とはそれのみで独立したのではなく、学ぶことによって世のために役立つ志を育成するもの、その規範によって行動を規制し人徳をたかめるものでした。書を読むことも音読を伴う行為であり、眼だけではなく身体の動作をとともなうもの、ひいては社会のための行動を育み、郷土を豊かにするためのものであったそうです。

つまり、江戸から明治初期に全国の寺子屋で行われた「修養」教育は、道徳や、郷土愛や、身体などと、わかちがたく結合したものでした。そして唐木順三は、そんな人間性、身体性をともなう修養を賛美し、「学問、知識によって養われた品位」という意味の教養は頭脳の遊技に過ぎない、と批判しています。

「教養といふこと」は今から57年前の発刊ですが、教育がただの情報享受になった、学校は生徒への知識注入工場になったという指摘はすでにそのころからあったわけです。

日本の近代化によって、人々は農村から都市に移動し、群衆の中で個人となり、ムラ社会内の規範・しがらみから解放されて、自由を手に入れ、同時に孤独になったといわれます。封建的家制度から核家族化へ、「規範と共同」から「自由と孤独」への変化が全国を覆いました。

それは、修養から教養への言葉の変遷に示されるように教育においても同様だったといえます。教育は民主的になり、規範による行動の規制や思想の偏向や地域への執着から自由になったのかもしれませんが、しかし、都市化とともに公共・共同という概念が失われ、個の利益のみを追求する自分本位で孤独な社会を生み出しました。

現在、中央集中の工業化都市文明は行き詰まりを迎えたといわれます。そのなかで、地域社会、農村文化に新しい可能性が期待されはじめています。同様に、教育における別の可能性、違う希望も、農村のなかに鍵があるのかもしれませんが。

武川中学校の子供たちと話しをしたあとに、そんなことを考えました。

書評 「奇跡のリンゴ」

木村秋則の記録
(幻冬舎)



新谷 知大

青森県のリンゴ農家、木村秋則氏による無農薬のリンゴ栽培に挑戦してきた軌跡を紹介している本。ご本人の強い執念とご家族や周りの方々の支えの中で、長く辛い貧窮の時期にも志を失わないその姿には、同じ農業者としてとても感動しながら読みました。

無農薬栽培や、有機栽培と言うと、なにかと注目をもたれている昨今、食に対する安心、安全な農産物、栄養価の高くおいしいものという付加価値を加えていると思います。

ただ、農業の効率化と多収量を求めた近代化の中で、農業というものがかなり重要な役割を担い、また、農家にとってある程度のリスクや不安の軽減をして安定的な栽培と収入をもたらしています。

ここで紹介されている主人公の木村秋則氏はリンゴ栽培に必要不可欠とされてきた農薬の使用を止めてしまい、十年近い無収穫時代を経て、様々な試行錯誤の中で森の木々は農薬など必要としないという事に気付き、無農薬、無肥料という自然農法でリンゴの栽培に成功した人です。歴史を遡って考えると、リンゴの木と農薬はどちらが先にあったものなのか、リンゴの木がいつからあったのか僕には分かりませんが、ニュートンの時代、彼はリンゴの落ちる様を見て万有引力を発見したのだとすれば、そこにリンゴの木は存在したのでしょう。そこにあったリンゴの木から僕達が知っているリンゴになるまでの長い歴史の中で、人間の手が加わり品種改良されてきた、そんな現代のリンゴの木は、自然の持つ本来の強さを失い、農薬が無くては生きていけない存在になってしまった。農産物が自然の産物というよりも、ある種の石油製品になってしまった。人間に都合のいい結果を得ようとする人の営みが、つまり農業ということになってしまった。

自然の摂理と人間の都合、この二つをどのようにして折り合いをつけていくのかという問題は、これからの僕達にとって見出していく必要のある一つの問いになっていると思います。

「わかりやすい」はいいことか

秋山眞兄(きららの学校校長)

12月になると、2月に実施する入学試験問題の作成の最終段階になり、問題の文章の細かな検討が行われる。その際に、いつも議論になることがある。それは、説明が不十分ではないのか、あるいは逆に丁寧すぎるのではないのかということである。私はほとんど「丁寧すぎる」という意見をいう。なぜそこまで詳しい説明をする必要があるのか、その程度のことは理解したり想像したりするのが当然で、それができないならば合格できなくても仕方がない、と私はほざく。若い教師たちは「もっと丁寧に説明すべきだ」と主張することが多い。

そのやりとりをしながら思い浮かべるのは、一つはスーパーに並んでいる綺麗な野菜、時には料理レシピまで付いている。もう一つは「わかりやすい授業が最上の授業」という親・教師・マスコミ・文科省の四位一体である。

丁寧でわかりやすい、を当然とする社会は衰退するしかない。まして、日本の「リーダー」といわれている人たちの言葉は、理解や想像を求められる言葉でないどころか、わかりやすさもない薄っぺらな垂れ流しの言葉でしかない。世も末である。

キララの子供もたちに、「わかりやすい」ということは必ずしもよいことではない、ということを経験するに従って感じていてもらいたいと思う。

2009 年が始まりました。

秋山澄兄 (きららの学校事務局)

昨年末から今年に入り、そして今も新聞やニュース番組からは金融危機・経済恐慌の暗い情報ばかりが入って来ています。経済的には厳しい状況がしばらくの間続くのでしょうか、牧場でも危機感を募らせています。

それでも「きららの学校」は今年も明るく、そして元気よく活動していこうと思っています。事務局はじめスタッフ一同、きららの活動を続けるために全力で頑張っていきますので、今年も宜しくお願い致します。

さて、冬を迎えた白州は冬の学校が終わった数日後に大雪に見舞われ、あたり一面雪景色となりました。昨年は3月1日まで雪が寝ていましたが、今年はどうなるか心配です。「まだまだ大雪が来る」と聞きますし、「暖冬でこのまま暖かくなっていくのでは」とも聞きます。読めない天候は作付にも影響するので牧場も大変で、冬の学校で追肥をした越冬ハウレン草の生育状況も心配です。

そんな中、春の学校の定番プログラムになっている「レタスの定植」に備えて、レタスの播種が始まりました。2月に入ると順次に。苗作りのための播種が始まっていきます。厳しい寒さに震えながら春に向けて、夏に向けて、少しずつですが動き始めています。

ひよこも順調に育っています。冬の学校の時に比べると、ひとまわりかふたまわりも大きくなったのではないのでしょうか？

3月に入ってすぐに、500羽ずつ、2つにわかれて育ってきた雛が一緒になり、雛舎から通常の鶏舎に移ります。ひよこは大人への旅立ちの時を迎えるのです。

500羽のひよこを任せられている韓国からの研修生「チェさん」も、ひよこの旅立ちと同時に約1年の研修を終え、韓国へ帰国する予定です。みんなが大きな希望と期待を持って春を待っています。

春の学校は3月30日～4月3日の予定です、きららのみんなと会える事を楽しみに待っています。

農産物をつくる手で本をつくる

内藤 光



白州で出版活動をはじめます。「白州書房」。これが新しく立ち上げる出版社の名前です。一昨年(2007年)の暮れからゆっくりとですが活動をはじめ、去年の11月、ようやく一冊の本が出来上がりました。「白州郷牧場通信 vol.1 サバイバル

を目指す農場」と題された全64ページの小冊子がそれです。テーマはここ、白州郷牧場です。決して分量は多くありませんが、ここで働く人々の素顔、キララの学校としての教育活動やBMW技術の実験農場としての歴史、そして農場を囲む豊かな自然の表情を余すところなく伝えています。

私はこの本を、高校生から二十代前半の若い人たちに読んでもらいたいと考えています。石油資源の枯渇や金融恐慌と、社会のあり方は刻々と変化していき、今までのような「豊かさ」を享受することが困難な時代がやってきます。そうした時代を生きる人々に向けてこの本は作られました。

私自身も現在24歳、大学を出てから一年半程度の若造です。普段は白州郷牧場で農作業をしています。そこでの経験から、多くのことを学びました。農業技術だけではありません。ここに関わる人々から、なにか生きるためのヒントのようなものを示してもらえたと感じています。白州郷牧場を特集することによって、それを少しでも多くの人に伝えることができれば、と願っています。どうか手にとってみてください。

～春のもちつきや椎茸植菌、レタスの定植～

2009年3月30日(月)～4月3日(金)に
「きらら春の学校」が開催されます!

詳細は、 <http://www.hakusyu.jp/kilala/>

お問い合わせはお電話か、電子メール
info@hakusyu.jpにてお受けします。→

また右のQRコードを読み取っていただくことで、携帯電話からも「きららの学校」の最新情報をご覧になれます。

